僕の名前は胆尾。
このクラスの男子生徒で、今年で○5歳になる、[redacted]○二年生だ。
趣味はエロゲとエロアニメ、あとはコミケでエロコスプレの撮影をする事かな。
クラスメイトからはキモオタと呼ばれて忌み嫌われているが、
相手にされないだけで、別にイジメられてるわけじゃないから、コミュ障害の僕としてはむしろ快適だ。

そんな中で、唯一僕に話しかけてくれる女神がいる。
イギリス出身の金髪緑眼の美少女、アルトリア・ペンドラゴンたんだ。
まるでアニメかゲームの世界から飛び出してきたかと思うほどの、
完璧な顔、完璧なスタイル、そして清く正しい立派な性格。
剣道部では優秀な成績を収め、一年生にも関わらずレギュラーを勝ち取り、
学業でも非の打ち所が無い成績で、生徒会委員まで勤めている。
あまりの完璧さに「マスター・アルトリア」なんて呼ばれてるくらいだ。
当然、クラスの人気者、いや、学校中の人気者であり、先生からの信頼も厚い。
そんな僕とは対極に位置する女神が、僕に話しかけてくれる唯一の人なのだ。

もっとも、話しかけられる内容といえば、小言ばかりだ。
もっと積極的に学校行事に参加しなさいとか、女子をいやらしい目で見るのはやめなさいとか。
そうやって注意されるたびに、僕は勃起して射精してしまいそうになる。
ああ、あの女神アルトリアたんを思い通りにしたい。僕と同じ変態に堕としてしまいたい。

そんな時、好きな相手を言いなりに出来るという魔術が書かれた本を発見した。
そして、放課後の学校に残って、アルトリアたんが生徒会の会議から戻るのを待っていたのだ。

【アルトリア】「あれ？　胆尾君、まだ残っていたのか。こんな時間なのに何をやっているんだ？」
【胆尾】「ふへっ…ふへへへっ…」
アルトリアたんが、僕を睨み付けるように見ている。
この目で見られると、ゾクゾクして勃起してしまう。
【アルトリア】「用事が無いなら早く帰りなさい。また先生に怒られるぞ？」
【胆尾】「ふへっ…その前に、僕の手の甲のこの模様を見て欲しいんだけど…」
【アルトリア】「模様？　何それ…？」
僕は魔道書に書かれていた通り、手の甲に刻みつけた令呪という模様を見せつけ、呪文を唱えた。
最初は怪訝な目で見ていたアルトリアたんだったが、次第に真剣に令呪を見つめ始めていた。

【胆尾】「あ…アルトリアたん…？」
【アルトリア】「…」
【胆尾】「まさか…本当に魔術にかかったのか…？」
いつの間にかアルトリアたんの目からは光が消え、表情が消えうせていた。
魔術なんて半信半疑だったが、本当に魔術にかかっているのだろうか？
僕はそれを確かめるために、アルトリアたんの背後に回って、後ろから抱き着いてみた。
【アルトリア】「…」
【胆尾】「抵抗しないっ……！　ほ、本当に魔術に…催眠にかかってる！」
僕は夢中になってアルトリアたんの柔らかいおっぱいを揉んだ。

【胆尾】「ああ、やわらかいっ！　これが女の子のおっぱいか！」
【アルトリア】「…」
そして僕は、片方の胸をつかんだまま、もう片方の手を股間へと伸ばした。
アルトリアたんは、スカートの下にブルマをはいていた。　アルトリアたんの股間に指を這わせると、
柔らかい感触が指先に伝わり、その瞬間、アルトリアたんがビクッと体を震わせた。
【胆尾】「へへっ…催眠状態でも感じるんだねっ…」
【アルトリア】「…」
僕が股間を愛撫し続けると、アルトリアたんの息がだんだん荒くなり、頬が赤くなっていった。

【胆尾】「…ふう、堪能した。さて、これからが本番だな…」
僕はアルトリアたんの体から離れ、次の催眠を実行する事にした。
この魔術は、強い刺激を与えると、催眠状態が簡単に解除されてしまう。
だから、催眠状態のままセックスする事は難しいし、人形を犯しているようで少し味気ない。
しかし、催眠中に命令し、意識に刷り込んだ事は、新たな常識として植えつける事が出来るのだ。
そこで僕は、催眠を解除する前に、アルトリアたんにとある命令を下した。
【胆尾】「…これで良しと」
【アルトリア】「…」
そう命令を下し、僕はアルトリアたんの耳元で手を叩いて、催眠状態を解除した。

【アルトリア】「…ひっ!? びっくりした…いきなり何をするかっ!」
【胆尾】「ふひいっ…! ご、ごめんなさいっ」

耳元で叩いた手の音で正気に戻ったアルトリアたんは、
突然耳元で発生した音にびっくりしたようで、僕をにらみつけた。
ちゃんと催眠時に命令した言葉が、新たな常識として植えつけられているか、
僕はどきどきしながらアルトリアたんの目を見つめた。

【アルトリア】「とにかく、こんな時間まで意味もなく居残りしていたのだから、
生徒会の者として、君の行動を見逃すわけにはいかない。
だから罰として、君は今から私の処女マンコで逆レイプして、
私の子宮にたっぷりと精液を搾り取らせてもらうからなっ!」

【アルトリア】「ほら、準備をするから少し待っている」
そう言うと、アルトリアたんはスマートフォンを教卓へと置いて、録画のスイッチを押した。
そしてスカートの中へ手を入れ、下にはいていたブルマとパンツを脱ぎ捨てると、
スカートを捲り上げて、スマホに向けて割れ目をさらけ出した。
【アルトリア】「私はアルトリア・ペンドラゴン。○5歳、[redacted]○一年生です。
これから、意味も無く無断で居残りをした胆尾君に、
罰として逆レイプし精液を搾り取り、その一部始終を撮影します」
【胆尾】「うひぃっ…！」
あんないかれた命令を本当に口に出して実行した。僕は喜びと興奮で変な声を上げてしまった。

【アルトリア】「ほら、そこで服を脱いで横になりなさいっ」
【胆尾】「は、はいっ…」
僕は大慌てで全裸になって、アルトリアたんの正面に横たわった。
ギンギンに勃起したペニスの皮の隙間から、濃厚なチーズのようなチンカスが露になる。
【アルトリア】「こんなチンカスだらけの立派な童貞オチンチン、
これから私の処女マンコに逆レイプされるなんて、
凄く屈辱だろうけど、これも罰だからな。
精液もチンカスも搾り取ってやるから覚悟しろっ…!」
そう言ってアルトリアたんは、僕の体を跨いで、ゆっくりと腰を下ろし、
僕の愛撫でほんの少しだけ濡れた割れ目に、僕のペニスを飲み込んでいった。